



第7回アジア体験旅行 シンガポール・ボルネオ7日間

日 程：2007年3月25日（日）～2007年3月31日（土）

訪問地：シンガポール・ボルネオ島（マレーシア）

旅行主催：京王観光株式会社
企 画：財団法人国立国際交流奨学財団
企画協力：社団法人日本マレーシア協会

第 7 回アジア体験旅行(シンガポール・ボルネオ 7 日間)

開催日時: 2007 年 3 月 25 日(日)～3 月 31 日(土)

訪 問 地: シンガポール・ボルネオ島(マレーシア)

主 催: 京王観光株式会社

企 画: 財団法人 共立国際交流奨学財団

企画協力: 社団法人 日本マレーシア協会

<参加者(計 11 名)>

1. 犬飼 佳宏 桜美林大学 3年
2. 大広 祐太 早稲田大学 2年
3. 伊藤 美奈子 日本大学 1年
4. 江田 幸子 創価大学 1年
5. 鈴木 ひかる 静岡県立浜松北高等学校 3年
6. 田中 杏実 都立国際高等学校 2年
7. 濱中 砂穂里 埼玉県立和光国際高等学校2年
8. 檜村 美穂 埼玉県立和光国際高等学校2年
9. 神崎 千穂 埼玉県立和光国際高等学校2年
10. 中嶋 真麻 文京学院大学女子高等学校2年
11. 大橋 唯 文京学院大学女子高等学校2年

アジア体験旅行日程表

訪問地:シンガポール・ボルネオ島(マレーシア)

3/25(日)

空路、クアラルンプール経由コタキナバルへ
＜コタキナバル泊＞

3/26(月)

在コタキナバル日本総領事館表敬訪問
マレーシア・サバ州政府観光局表敬訪問
現地学校訪問・交流
政府観光局主催歓迎レセプション
＜コタキナバル泊＞



3/27(火)

空路、サンダカンへ
セピロック・オランウータン・リハビリセンター見学
ジャングル体験
スカウ・リバークルーズ 1泊2日コース
＜スカウ泊＞



3/28(水)

空路、コタキナバルへ
＜コタキナバル泊＞

3/29(木)

空路、シンガポールへ
シンガポール市内観光
ナイトサファリで食事と見学
＜シンガポール泊＞



3/30(金)

シンガポール市内観光
空路、クアラルンプール経由成田空港へ
＜機中泊＞

3/31(土)

成田到着、通関後、解散



＜宿泊先＞

コタキナバル	: Berjaya Palace Hotel : 1JL.. Tangki, Karamunsing, Kota Kinabalu 88992
サンダカン	: Sukau Lodge : Bandar Pasaraya Mile 4, Lot74, 1Floor Block J, 90007
シンガポール	: York Hotel Singapore : 21 Mount Eelizabeth, Singapore 228516

世界でグローバルウォーミングが取りざたされるなか、豊かな自然の残るボルネオ島から今回の「アジア体験旅行」は始まった。7 日間という決して長くはない日程のなか、アジアの現状を真摯に受けとめ、互いに触発しあった学生たち。今回の旅は、「いま、自分が出来ること」を真剣に考えはじめた彼らにとって、貴重な経験となったのではないだろうか。

サバ州の州都コタキナバルから飛行機で約 1 時間。草原の中の小さな小さな空港に人が溢れる。ここ、サンダカンに集まる人々の目的の一つ、セピロック・オランウータン・リハビリセンターへ。センターでは、育児放棄された子供、人間によるジャングルの侵食によって棲む場所を奪われたものなど、様々な理由により、そのままでは生きることが困難なオランウータンを集め、再びジャングルへ戻るための訓練をしている。社会が豊かさを追求することで、遥か彼方に棲む彼らの生活をも脅かしていることを、また、人間社会と自然界の共存の難しさを改めて思い知らされた。

ジャングルクルーズを終えた夜、民族衣装である「サロン」を着た学生たちがロッジの外へと集まっていた。降るような星空に感嘆の声を上げる。ロッジで働く現地の若者たちの 1 人が、携帯電話から流し始めたのはみんなが知っている日本の曲。その曲はマレーシアで人気があるという。これが突破口となり、マレー語のわからない学生たちが、一生懸命英語で話しかけコミュニケーションをとりはじめた。なかなか伝わらないことに歯がゆさを覚えながらも、それでも話しかける。コミュニケーションをとるうえで言葉のスキルはもちろん重要だが、それ以上に大切なものがあることを学生たちは学んだだろう。

シンガポールに向かう飛行機の窓から、森林が伐採され地面が露になったジャングルが見えた。その木材の多くは日本にも輸出されている。そして、痕には収益性の高いパームヤシを植えるのだそう。悲しいまでの現実だが、先進国入りを目指すマレーシアにとっては「仕方のないこと」の一つなのかもしれない。

シンガポールの曇り空を突き刺すように建つ摩天楼。美しく整備された街並み。足早に歩く人々。欲しいものは簡単に手に入る、とても便利で馴染み深い都会の生活。今回訪れた 2 つの国には全く違った「豊かさ」があり、であるからこそ、個性を生かしたそれぞれの国づくりをして欲しいと願うばかりである。

最後に、このような素晴らしい体験が出来るようご尽力を頂いた関係者の方々に、改めて感謝の意を表したい。

倉本 沙織
共立国際交流奨学財団

参加学生による「アジア体験旅行記」

(所属は旅行参加当時)

「ホスピタリティ精神は「心」のもてなし」

桜美林大学 3 年 : 犬飼 佳宏

今回のマレーシア・シンガポール旅行では、1 週間分とは思えないほどの濃密な時間を過ごす事ができた。旅行中、飛行機の発着が遅れたことを始めとするトラブルがほぼ毎日起きた。このトラブルは旅行の中で最も印象に残った事の 1 つである。今だから言えるが、おそらくこのトラブルの原因は私の日頃の行いが悪かったからである。すいませんでした。

トラブルを含め様々な体験の中から私が感じたもの、それは「ホスピタリティの精神」である。ホスピタリティとは「もてなし」の意味である。この言葉は、旅行前のミーティングで入江先生がおっしゃっていたことであり、私は旅行中、ホスピタリティをキーワードにして人々を見ていた。具体的に言えば、マレーシアの人々の「ホスピタリティの精神」はどのように構築されているのかを知ろうとしていたのである。

マレーシアの人々は、「優しく、温かく、笑顔が素敵」といった印象を持った。マレーシアに行ったことのある日本人は、100 人中 100 人がこのように感じたはずだ。このような気質が、素晴らしい「ホスピタリティの精神」を構築していることは間違いない。ではこれで全てなのだろうか。日本人もこれらのことはしっかりやっていると。例えば私のバイト場では、店長から接客に関して笑顔、温かみ、丁寧さ等の指導を受けている。私自身、接客には力を入れている。

しかし、私から見たマレーシアの人々の人情味は日本のものとは質的に違う何かがあった。旅行中、様々な事を経験していく中で私は 1 つの共通点を見つけた。空港の出発ゲートで搭乗待ちの間、旅行ガイドさんが見ず知らずの現地の方と仲良さげに会話をしていた時。ロッジで働く男の子とあっという間に仲良くなった時。道端ですれ違う人々が私に対して笑顔を振りまいてくれた時。そう、そこには相手を受け入れようとする「寛大な心」と、それによってできた「信頼関係」があったのだ。「寛大な心」と「信頼関係」から滲み出るものがマレーシア人の穏やかな気質だったのだ。

昔の日本には、地域ぐるみになっての取り組みが多くあった。地域が 1 つの大きな家族のようなものだったので相手に対する寛容な心や信頼関係はしっかりと育まれていた。現在の日本では、核家族化が進むなど、寛大な心もそれによってできる信頼関係も築くことができない状況になっている。日本は急速な経済発展の代償として、この心を失ってしまったのである。マレーシアは、高い経済成長率を維持し続けているが、この素晴らしい地域社会によってできる人と人とのつながりは非常に強固なものである。だから、質の高い「ホスピタリティ精神」が今も人々の中に息衝いているのだ。日本も形だけのホスピタリティではなく心の豊かさを享受した真の意味での「ホスピタリティ精神」を目指すべきだと感じた。マレーシアの人々の豊かな人間性を手本とし、毎日の生活に活かしていきたい。

ここまで深く掘り下げて考えることができたのは全てこの旅行があったことだ。この素晴らしい

機会を与えてくれた共立国際交流財団に深く感謝する。そして旅行の引率をしてくださった入江先生、倉本さん、大淵さんにも感謝したい。ありがとうございました。

「百聞は一見に如かず」

早稲田大学2年：大広 祐太

アジア体験コンテストの予選終了後、自分がこの研修に参加している姿を全く想像できなかった。理由は単純で問題の回答に全く自信がなかったからである。しかし奇跡とも言える運の良さで入賞することができた。その時の喜びは今でも忘れられない。そして実際に体験旅行に参加し、このときの幸運がどれほど大きかったのかということがわかった。

今回はマレーシアとシンガポールの二つの国に行ったのだが隣接している二つの国は全く違う表情を持っていた。

最初にマレーシアの空港に降りた時、その綺麗さにまず驚いた。勝手にマレーシアは発展途上国だと思っていたからだ。しかし実際にはそんなことはなく、経済的にも発展を遂げ、先進国入りを狙えるような位置まで来ている国なのである。このことは帰国後、調べてわかったのだが実際にマレーシアに行くことがなければ勘違いをし続けていたかもしれない。これだけでも実際にマレーシアに来た意味があると思う。この国では豊かな自然を存分に楽しんだ。オランウータン、テングザルなど珍しい動物が生息していた。政府観光局でもこの自然が最大の売りなのだということを言っていた。この地域の人々がオランウータンを必死で守ろうとしているのは「可哀想だから」という理由だけではなくオランウータンを失うことは自分たちの生活を失うことなのである。逆に人間に守られているオランウータンも保護がなくなれば生きていくことができない。ここではこの二者はまさに共生しているのである。このことをどう思うかは意見の分かれるところであると思うが、個人的には結果として自然が守られているという事実だけを見れば評価できる取り組みなのではないかと思った。そんなマレーシアでも工業化が進んでおり、少しずつ自然が失われているという。この自然を失うことは大きな損失であることは疑いないが、経済発展に工業化は必要不可欠である。この両立はとても難しい。今こそ環境大国である日本の協力が必要とされているのではないだろうか。

シンガポールは予想通りの先進国であり、日本にいるのと錯覚しそうなほどだった。ここではナイトサファリに行ったが、やはり人工的に作られた自然に違和感を感じた。皮肉にもここに来ることでマレーシアの自然の尊さを再認識することができた。

最後に、このような素晴らしい体験をするチャンスをくださった共立国際交流奨学財団、入江先生、倉本さん、大淵さん、そして自分に奇跡的幸運をくださった神様に深く感謝申し上げます。

「自然体であることの美しさ」

日本大学1年：伊藤美奈子

今回、私にとっては初めての海外でどんなことに対しても刺激を受けることばかりだった。海外に行

くのが初めてなのだからもちろんマレーシアとシンガポールに行くのも今回が初だった。いままでどちらの国も首都と名産物くらいしか知らなかったし、この国を深く知りたいと思うことはあまり無かった。だが、日本に帰ってきてから2つの国をこんなにも勉強している。

行く先々で目が合う人みんなが微笑んで、挨拶をしてくれた。それだけで私は何か大切なものをもらったように嬉しくなった。笑顔だけで心から溢れる幸せがある。日本にいたそれまでの私は、特に大学に入ってから勉強しよう資格をとろうアルバイトをしてお金を貯めようと日々の生活を予定で埋めきっているうちに、「ほんとうの笑顔」が出来なくなっていた。というより小さなことにも感謝の心を持つことが出来なくなっていたのだと思う。

人と競争するうちにどうやって周りより上に立つかばかりを考えるようになり、混雑する駅の中で道を譲ってもらってもそれがいつのまにかそれを当たり前を感じる様になっていた。

特にマレーシアでは現地の人と話をしていくうちに徐々に肩の力が抜けていって、自分に見栄を張ることなく、アルバイト時の造り笑顔ではない、自然体でいてはじめて出来るほんとうの笑顔が取り戻せた気がする。現地であったガイドさん、スカウのロッジの人々、野生のテングサル、リハビリセンターのオランウータン、お土産売り場の人々、高層ビルが視界に入らない空、ボートから見る水平線、現地 Sekolah Menengah の学生との交流、歓迎を受けて耐えることの無い衝撃と優しさを感じた。と同時に自然体でいる人、物、人造物に邪魔されない景色と環境がどれだけ美しいかということに気付かされた。日本にいては気付けないままだったかもしれない。現地の人の文化に触れ、交流することで固定観念として持っていた『常識』が非常識であることに気付かされた。

一週間の間だったけどこの体験旅行で、私は私たちを温かく迎えてくれたこの2つの国に恩返しをしたくなった。そのために今出来ることはその地についてもっと知る、勉強する、理解しようとする事だ。独りよがりな理解力だけではなく、現地で出来た友達との続いていく交流のなかでも発見できる新鮮な出来事と共にそれを友達や家族にも反映できれば、やりがいももてると思う。何年後になるかはわからないけど、現地についてたくさん勉強し、自力でお金を貯めてまたあの地へいける日を楽しみにしている。

最後に、今回お世話になった倉本さん、大淵さんをはじめとする財団の皆さん、引率してくれた入江先生、一緒に行った仲間、海外へ行くことを許可してくれた家族、協力してくれたガイドさん、現地の皆さん、本当に本当にありがとうございました！！

☆Jumpa lagi☆

「一生に一度の一週間」

創価大学1年： 江田 幸子

私は東南アジア諸国が大好きで、今回もマレーシア・シンガポールの旅ということで、即座に応募しました。私が東南アジアが好きな理由、①あの「むあっ」とした気候 ②地元の温かい人との出会い ③いつも感じる新鮮さ この3つに尽きます。今回の旅では見事に私の期待通り、それ以上の経験をする事が出来ました。

私がこの旅にテーマを付けるとしたら「出会い」と付けます。この旅では、2つの出会いがありました。

まずは、地元の人との出会い。私の忘れられない思い出、スカウでのジャングルクルーズのロッジで過ごした1日。夜ご飯の後、ロッジで働く地元の人たちとの交流が自然と始まり、ギターを弾いてくれたり歌を歌ってくれたり、民族ダンスを教えてくれたり…言葉は通じなくても、本当に心の底から「楽しい!」と思いました。私に1つの目標ができました。「あのロッジに絶対また行くぞ!!」。また、盛大に歓迎してくださったマレーシアの学校の先生方・生徒達との出会い。シンガポールでの日本語が達者で、かなり値切ってくれるおじちゃんとの出会いなど、本当に温かな人たちにたくさん出会いました。日本のあのごみごみとした中で、自分もこんな人になれば、接した人も今回自分が感じたように温かい気持ちにすることが出来るのだと思いました。一人一人の力はすごいと気付かされました。

そしてもう一つは、一緒に旅したみんなとの出会いがありました。ここをはずしたらこの旅は語れません。会った当初からずっと、みんなに触発され、楽しませてもらって、本当に感謝しています。個性豊かなみんなと1週間旅ができて本当によかった。またこのメンバーで旅ができたと思います。

また、自分自身、決意をすることも出来ました。日本総領事館では、マレーシアの持つ問題を学びました。マレーシアは私が思っていた以上に経済発展もしていて、街もきれいでした。しかし、目に見えないところでの問題は様々あり、私達は自分達の住む日本を「アジアの中の日本」として考えなければならぬと改めて思いました。改めて、私は東南アジア諸国で貢献できる人材になる!と決意しました。

最後に…最初から最後までハプニング続きの中、この旅を無事故で過ごすことが出来たのは引率者3名の方々のお陰です。最高の1週間を過ごすことができ、本当に楽しませていただきました。本当に本当にありがとうございました。

「マレーシアでの研修旅行を通して」

静岡県立浜松北高等学校 3 年 : 鈴木 ひかる

熱帯の暖かい風、神秘的なイスラム教のお祈り、道沿いにあるヤシの木…日本に帰国して2週間たった今でもマレーシアの旅行でのいろいろな情景が頭に浮かぶ。そんなマレーシアの旅行で私にとって一番印象的なのはマレーシアの人たちを通して学んだ「優しさ」である。バスの運転手さんが「apa khabar?=(元気?)」と声をかけてくれたこと、ホテルの従業員さんに日本語で挨拶してもらったこと、写真を撮るとき一緒にピースをしてくれた学生…私はマレーシアの人々の明るさや優しさに滞在中、毎日感動した。マレーシアでは、待ち時間でさえも楽しく感じた。

三日目の滞在では、スカウのロッジに滞在した。スカウのロッジは、自然に囲まれていて多くの観光客がいた。ロッジの従業員には私と同じくらいの年の人も多かった。ロッジのお土産屋さんで働く女の子は、朝から仕事があるにもかかわらずマレーシアに興味津々の私にマレー語の歌を教えてくれたり、挨拶を繰り返し教えてくれたりした。マレーシアの人たちの優しさや寛容さが本当に心にしみた瞬間だった。そこでは文化や言語の違いがバリアとなるどころか、その違いが逆にマレーシアの人たちとずっと仲良くなれるきっかけになった。マレーシアの携帯の機能の多さにびっくりしたり、日本のプリクラについて説明したり…文化の違いがあるからこそ楽しかったのだと思う。

日本では外国人の問題になるとすぐに文化や言語の違いなどに結びつける傾向がある。しかし、マレーシアでのいろいろな交流を通し本当はそんなこと関係ないのではないかと感じるようになった。言語が違うからというだけで、お互いが仲良くできないなんてことは絶対ない…そう強く感じた。何気ない会話や一言にも、私はマレーシアで優しさを感じることができた。困っている人がいたら助ける、隣にいる人に挨拶をする…当たり前なようで、現在の日本では失われてきているこのような小さな優しさがマレーシアにはあふれていた。私はそんなマレーシアの優しさが大好きになった。そして自分の母国である日本が学ぶべきことだと実感した。言語の問題よりももっと感覚的なものがコミュニケーションでは大事だと思う。そしてそのような優しが多民族で共生していく上での、ひとつの鍵でもあると思う。

マレーシアであったいろいろな人たちとの交流は私に本当にいろいろなことを考えさせてくれた。マレーシアにも日本にもお互い違ったよさがある。そしてそれはどんな国にも共通することだ。今はまだ貢献できることは少ないけれど、マレーシアで学んだ「優しさ」をもっと人に伝え、少しでも自分の経験を生かしていきたい。

「見極めの旅」

都立国際高等学校2年 : 田中 杏実

コタキナバルに着いた初日の夜には、30度もあるマレーシアの高温多湿な気候に驚かされました。翌日、日本領事館では、政府の方に国について話を聞き、2020年にはマレーシアは先進国になるということ、そのためには、比較的のんびりした時間やルール、約束をあまり守らないマイペースな人々の意識を変えていく、と言うような問題もあるということなどを聞きました。そして3日目には、サンダカンに移動して、宿泊するロッジにボートで向かいました。そこには、シャンプーもリンスもなく、お風呂場にはアリの行列ができていたりしたけれど、マレーシアでの生活に慣れた私にとっては居心地のいいところでした。夜は民族衣装を着て、ロッジで働いている人達と歌ったり、踊ったりして言葉を超えたコミュニケーションで楽しむことができました。そこで出逢ったアマンダと言う18歳の女の子と仲良くなり、今でもメール交換をしています。学校に行かず、ずっとロッジで働いているアマンダの生活は日本に住んでいる私には想像もつかないことでした。私にとっての当たり前が、そうでない国もたくさんあるんだということを実感しました。でも悲しいとは思いません。アマンダが幸せならそれでいいと思います。

5日目には先進国のシンガポールに行き、途上国のマレーシアとのギャップを痛感しました。表参道に似ているショッピング街にはブランド店が立ち並び、人々もマレーシアに較べると、他人には興味がないような怖い目をしていたように思います。先進国になるということは、人さえも変えてしまうことなんだ、と思ったけれど、アマンダ達にはもっと好きなことをして欲しいとも思うし、でもアマンダにはあのままいてほしいとも思いました。ちょうどいいって難しいことだと思います。シンガポールを見ると、先進国になるイコール、西洋化あるいは欧米化され、自国の長所や特徴を消されてしまうことのように感じました。

それから、私に大きな影響を与えてくれたのは旅の仲間でした。みんな意識が高くて、何かしら国

際情勢やボランティアに興味を持っていました。格差や貧しい国のことについて語ったりしたけれど、結局今自分できることは勉強なんだな、と思います。一人一人違う考えを持っていて、すごくいい刺激を受けました。

マレーシアの暖かい人々の雰囲気から、普段は忘れていた「当たり前」のありがたさを感じ、また、シンガポールの近代的な空気からは、先進国になることとは何なのかを考えさせられ、そして旅の仲間からは、将来の夢をもらいました。私は今しっかり勉強して、将来餓死する子供がいるような国へ行って、自分の足で歩き、自分の手で助けたいと思います。アジア体験は多くのものを私に与えてくれました。入江先生、倉本さん、大淵さんありがとうございました。

「アジアに出会う旅」

埼玉県立和光国際高等学校 2 年 : 濱中 砂穂里

そんな事は無理なのだけれど、例えば、この旅行を一言で表すとしたら、“出会いの旅”だろう。

出発前日、私は期待2割不安8割のドキドキを感じながら、スーツケースに荷物を詰めていた。全く知らない土地に、全く知らない人たちと一緒にいく。自分で応募し、入賞し、手にしてすごく嬉しかった旅行だとしても、その不安は抑えられるものではなかった。

しかし、それは杞憂に終わった。私を待っていたのは、出会いの連続だった。新しい世界との出会い、仲間との出会い、現地の人々との出会い……今でも、色鮮やかに思い出すことが出来る。決して忘れることの出来ない、貴重な出会いだ。全て順調にいったわけではない、むしろトラブルは多かったし、言葉の壁など辛いことも沢山あった。それでも乗り越えられたのは、出会えた全てが何よりも素晴らしかったからだろうと思う。

今回の旅行では、総領事館や政府観光局など、普段行くことのできない場所へ訪問し、そして貴重な話を伺うことができた。途上国、先進国という国のあり方、考え方、問題点など、私が将来を考える上で、重要な話だった。言うなれば、夢を考えるきっかけとの出会い、というところだろうか。それだけでも私には嬉しいことなのに、何より素敵だったのは、スカウロッジでの体験だ。ジャングルクルーズでは、野生の動物たちを見ることが出来たし、夜には、現地の人々と交流もした。お互いに英語は片言だし、マレー語しか話せない子もいたけれど、踊ったり歌ったり、わけもわからず笑いあうその時間は、言いようが無いほど楽しい時だった。そして、気持ちを伝えられないもどかしさを覚え、もっと勉強したいと思った。そういう点でも、このロッジでの経験は本当に良かったと思う。

マレーシアの人々は、みんなとても温かかった。ガイドのサイモンからそうだったのだけれど、店員さんもホテルの人もロッジの人も、街行く人すら優しく、温かい。何かを言えば、たとえ通じなくても笑顔でこたえてくれる。正直に言うと、私は、今までマレーシアにそんなに良いイメージを持っていなかったのだけれど、それは今回の旅行でがらりと、本当に180度変化した。

旅のことは、一つ一つが思い出深く、ここに書き尽くすことは到底出来ない。オランウータンに出会ったこと、学校訪問、それから、みんなとの食事、トランプしたこと、語り合ったり、笑ったり、ドリアンを食べたりしたこと。こんなに楽しいと思える旅行になったのは、この11人と先生、スタッフの方だったからだと思う。一生を通して、こんなに素晴らしい経験は、そう何度もできるものではないだろう。

引率の入江先生、倉本さん、大淵さん。共立財団の方々、現地の人々。支えてくれた仲間や沢山の
人に、感謝します。本当にありがとうございました。Terima kasih！

いつか、絶対もう一度マレーシアを訪れようと思っています。今度は、マレー語を覚えて。

「出会いから学ぶこと」

埼玉県立和光国際高等学校 2 年 ： 櫻村 美穂

私はこの旅の中でたくさんを感じ、たくさんを学びました。

初めて訪れたマレーシアの町並みは想像していたよりも都会で驚きました。しかし、東京とは全く違う都会の様子。木々の緑や空や海の青、ゆっくりと流れる時間などに囲まれ、新鮮さを感じると共に居心地の良さを感じていました。特に心地良かったのはマレーシアの人々の温かさ。多民族国家であるが故に外国人への偏見の目は全くなく、満面の笑みを投げかけてくれる人ばかりだった気がします。バスで移動している途中、私達に向かって路上から手を振ってくれる人。観光場所で知っている日本語を使って話しかけてくれる人。日本には珍しい光景に感動してしまい、私はすっかりマレーシアの人々が好きになってしまいました。政府観光局の方や学校の方々は私達を大変歓迎してくれました。また、スカウロッジで出会った人々とは言語の違いがあったにもかかわらず、同じ時間を共有し楽しむことができたのです。手を取り合ってダンスを踊り、笑顔を交わして心を通わしました。その夜、満天の星空の下一緒に歌った日本の歌が今でも忘れられないほどです。不便な暮らし、不慣れな土地環境、私の偏見も全てマレーシアの人々が温かさで包んでくれたからこそ、あの時あの場所には最高の笑顔の私がいたと思っています。こうした人々との出会いに感謝の念を抱いたこの時に初めて、私は本当にマレーシアを深く知りたいと思いました。そして、こんなふうにして国境を越えて理解しあっていくことができたら…と感じ、改めて表現力や語学力の大切さを実感しました。

一方、シンガポールは私にとって憧れの国でした。『個性的なビルが建ち並び、ごみのない街路に人々が溢れる美しい国』というイメージそのものだったシンガポールは私の期待を裏切りませんでした。ここで嬉しかったのは勉強中の中国語を少しだけ生かす場面があり、意欲が増すきっかけとなったことです。ここでもやはり人との出会いがありました。

日本に帰ってきて、私自身、世界の見方や価値観、将来の夢に対する考えが成長したように思います。この旅の中での人々との出会いに感謝します。それから、今回一緒に旅をしたメンバーや倉本さん、大淵さん、入江先生との出会いにも深く感謝します。この最高に楽しい旅が私の人生に刻まれたことをうれしく思うと同時に誇りに思います。この旅を通して学んだことを忘れず、これからも世界の国々のたくさんの人々との出会いを求めて頑張っていきたいです。ありがとうございました。

「異文化の中で見えたもの」

埼玉県立和光国際高等学校 ： 神崎 千穂

飛行機を降りたとき、暖かい空気に包まれ異国に降り立ったことを改めて感じました。車窓から見

える風景、周囲で飛び交う言葉、道を行き交う人々、あらゆる場所で垣間見る多様な文化…。何もかもが自分の瞳に新しく映り、興味津々に見入ってしまいました。

行く先々で出会った方々は、どの方も私たちに対してとても親切で、素敵な方ばかりでした。今回の旅では特に、普通の旅行ではなかなか得ることのできない貴重な出会いがたくさんありました。マレーシアでの日本総領事表敬訪問では、総領事の方にお話を伺うことができ、マレーシアと日本の強い結びつきについて学ぶことができました。また、日本の企業やボランティア団体等が率先して環境事業に対して取り組んでいることを知り、是非私も力になってみたいと思いました。学校訪問では熱烈的な歓迎を受け、生徒達の伝統的な踊りや先生方からのおもてなしに感激しました。それから日本では出来ない経験も得ました。ジャングルクルーズでは、移動用の船の速さと乗る時間の長さに驚きつつも、マレーシア固有の自然に触れ、ゆったりとしたロッジでの時間は、都会の騒々しさを忘れさせてくれた、楽しい一時でした。

マレーシアとシンガポールで強く感じたのは、様々な文化や宗教が共存していたことです。時には中国に来てしまったのではないかと、と思うほど周りにチャイニーズの空気が漂っていることもあったけれど、振り返るとイスラム教のモスクがあったり…。でもこの「ごちゃ混ぜ感」がこの国らしさであり、これがゆったりとした雰囲気醸し出して、とても心地よく感じました。今、世界で宗教を理由として戦争が起こっている中、こんなにも理解し、協力し合って生活することができるのだと、とても感動しました。世界中で国際化が促されている今、互いに違いを認め合う寛容な心を持つ両国を日本も見習うべきだと思います。

この旅から得たものは、ここには書ききれないくらいたくさんあります。二つの国へ行ったことで、日本にはない多彩な文化、宗教、慣習に触れることができ、改めて自分の生活について見つめ直すきっかけとなりました。お風呂ですぐにお湯が出ることや、お金を払わずにトイレが使えるといった日本では当たり前となっていることでも、世界では当たり前ではない。小さな事だけれど、それを知っているのと知らないのとでは世界観が大きく異なってくると思います。

一緒に行った仲間からもたくさんの刺激を貰い、充実した楽しい旅になりました。引率して下さった入江先生、倉本さん、大淵さんをはじめとして、旅行会社の皆様、それから一緒に行った学生のみんなに感謝します。ありがとうございました。

「アジア体験旅行を通して」

文京学院大学女子高等学校 2 年 ： 中嶋 真麻

マレーシアに 4 日間、その後シンガポールに 2 日間滞在する予定の、このアジア体験旅行で、私は貴重な体験をさせていただきました。

今回滞在するのはボルネオ島。特にサンダカンには自然に恵まれ、時間がゆっくりと流れる穏やかなところで、首都 KL とは全く違う印象です。

まず私たちは、日本総領事館と政府観光局でお話を伺いました。総領事館ではマレーシアの進路や、それに伴う環境問題のお話を聞きました。観光局では、自然が豊かなボルネオの魅力をたくさん教えていただきました。私は両方のお話を聞いて、マレーシアを、先進国化と自然保護のバランスの

とれた、より魅力的な国にして欲しいと思いました。夜は観光局の方にディナーに招いていただき、マレーシアの伝統的な踊りや遊びを体験しながら、この国の素晴らしさを肌で実感しました。

翌日、私たちはオランウータンのリハビリセンターとジャングルクルーズへ行くため、サンダカンへ向かいました。

オランウータン・リハビリセンターは、動物園ではなく、傷ついたり、親をなくしたオランウータンに森での生きる術を教える学校です。綱にぶらさがりながら、バナナを食べるオランウータンは愛らしかったけれど、彼らがこのセンターにいないといけないのは、人間が彼らの生きる場所を奪ってしまったからだということを知りました。

ジャングルクルーズでは、キナバタンガン川をゆっくり進みながら、ヘビやトカゲ、そしてここにしか生息しないテングザルを見ました。テングザルは大きな鼻とお腹の持ち主で、木から木へと飛び移り、ジャングル生活を満喫しているようです。様々な動物の本来の姿を見てよかったと同時に、その姿を奪ってはいけないと思いました。その後、伝統衣装のサロンを着て夕食をとり、星空の下で、歌ったり踊ったりと、現地の人のあたたかさに触れました。ゆっくり流れる時間が心地よくてずっとこの場にいたいと思いました。

シンガポールで迎えた最終日、自分たちの力でマーライオンを見に行きました。一瞬不安になったりもしたけどマーライオンの前で撮った写真は勲章です。その後、最後の体験としてみんなでドリアンを食べました。

「百聞は一見にしかず」というけれど、ドリアンのことも含め、この旅行を通して、体験してみなければ分からないことがたくさんあると知りました。初めてのこの場所で、初めてのものを見たり食べたり、体験するのは、勇気がいるけれど、すごく楽しいし、新しい発見が自分を成長させてくれます。またその成長は新しい刺激だけでなく、一緒に過ごした仲間に従われる部分もあったと思います。みんな意識が高く、学ぶべき部分がたくさんありました。そんなみんなと一緒に、普段はあまりできない経験ができて、自分にとってプラスになったので、この旅行に参加できて本当によかったです。

共立国際交流奨学財団さんや入江先生、ありがとうございました。またみんなで行きたいです！

「マレーシアに行って」

文京学院大学女子高等学校 2 年 ： 大橋 唯

マレーシア・シンガポールには修学旅行で三週間前に行ったばかりだったので、初めてとは違い素早く荷物の用意などをすませ、よりによってまた同じ所・・・他の場所がいいなあ位に思っていました。学校で行った時に思ったマレーシアの印象は、ジメジメしていて暑い、トイレが汚い、水道水が汚い、皿が汚いなど、すべてマイナスなものばかりが目についてしまい、行ったその日から、日本に帰りたいと言っていました。それは私が前から思っていたアジアのイメージとほぼ同じだったので「日本と変わらない位進んで、とかポイ捨ての罰金が高いからキレイだ。」など言われて行ったのに騙されたと思っていました。なので空港などのキレイな所だけ楽しんで乗り切ろう位に考えていました。

コタキナバルに着くと荷物の到着が遅れたのが、初めての事だったので楽しかったです。こんなふざけた考えを持っていた私ですが、2日目のコタキナバル日本総領事館表敬訪問で話を聞き、中心部には高いビルもあって、コタキナバルは自然が多い感じだったけれど不自由なく暮らせそうだし、貧しい感じはしなかったのも、日本などの手助けは無くてもいいのでは、と思っていたのですが、マレーシアの人はゴミ捨てが定着していない事や時間にルーズな事など人間性の部分で日本は手助けをする必要がある、などの話を聞くうちに、私の他国に向ける目が変わったように思えます。上辺の悪いところだけしか見ずに判断していた事に気付き、今までは見ようとしていなかった事が自然と目に入り、気にかかるようになりました。

ジャングルクルーズは、テレビでしか見た事の無かった景色を生で見る事が出来、天狗猿やワニなどの野生動物を小さな船から眺めるのはなんだか特別な気分でした。2度目だったナイトサファリは檻が無く、世界でも希少になっている動物を身近に見る事が出来、とても迫力がありました。ガイドさんが全ての動物の生態や、数が少なくなってしまった原因を教えてくれるので考えさせられることが多くあり、初めての時は寝てしまう程関心が無かったのでこの旅行を通じて変わったと思います。

他宗教の文化にふれる事や、普通では関わる事の無い人に会え、一生に一度出来るか出来ないかの事をし、多くのハプニングがあった、7日間すべては良い思い出で、アジアへの関心を深め私を成長させてくれました。